

保育者養成における「ひと・もの・こと」に出会う 体験型学習プログラムに関する実証的研究(4)

——「こと」(野菜と藍の栽培)から「ひと」へのつながり——

近藤千草* ・葉山 登** ・箕輪潤子***
菅井洋子**** ・草信和世***** ・内海崎貴子*****

An Empirical Study on the Learning Program for Child-Care Givers- Based on Experiences of Interaction with People, Things and Events-(4) Cooperation with Others Attained through Growing Plants

Chigusa KONDO, Noboru HAYAMA, Junko MINOWA
Yoko SUGAI, Kazuyo KUSANOBU, Takako UCHIMIZAKI

要 旨

本学幼児教育学科では、1年生の通年必修科目として幼児教育体験学習を設置している。本科目のねらいは、様々な体験を通して学生の保育理解を進める点にある。保育者として体験することが望ましいと思われる事項を「ひと」の体験、「もの」の体験、「こと」の体験とし、体験型学習プログラムの有効性を検証する。科目の内容は栽培、制作、実演、講演など多様であり、本年度は昨年度の内容をさらに拡大して現在進行中である。本稿では、その中から「栽培活動」に焦点を当て、栽培活動を通じた学生の実態について振り返り記述(自由記述式)を用いて読み取っていく。

その結果、慣れない作業に戸惑いを見せながらも、友人や教員と協力しながら行う楽しさや素晴らしさ、達成感や充実感が見出された。その中で学生は、現在の自分、過去の自分、現在の友人や教員、過去の保育者、未来の自分等というように、多様な人に出会っていることがわかった。また、植物という命を扱うことが、人間の子どもを扱うときの場面、すなわち、栽培活動を保育活動に置き換えて考えるという思考の転換も見られた。このような結果から、保育者養成課程において栽培活動は、様々な「ひと」に出会うプログラムとしての有効性が示唆された。

*講師 教育学

**准教授 美術教育学・彫刻

***准教授 保育学・幼児教育学

****講師 発達心理学・保育学

*****准教授 児童学・保育学

*****教授 教育学

キーワード：保育者養成，体験型学習プログラム，ひと・もの・こと，栽培活動

1. はじめに

保育者養成課程において、実践的な保育者の育成に努めることは今日的課題となっている。保育士養成協議会（2006）においては、「保育士養成のパラダイム転換」を打ち出し、「反省的実践家」としての保育者が、「成長し続けて」いくことを求めた。保育とは日々の実践を振り返り、次に生かすという螺旋的な営みとも言える。そこで養成課程において重要なのは、いかなる状況においても臨機応変に対応できる実践的な態度・行動力を養っていくことである。

しかし近年、保育を学ぶ学生が実習において直面する大きな壁が明らかとなってきた。それは、「体験の不足」から生じる問題である。その体験とは、例えば、「挨拶ができない」、「時間を守らない」、「決まりを守れない」、「掃除の仕方を知らない」、「調理ができない」、「子どもたちと積極的に遊ば（べ）ない」、「コミュニケーションが取れない」など枚挙にいとまがない。これらは保育実践において基盤となる事項であり、保育者養成課程において早急に取り組むべき課題となっている。

このような実態を受け、実践力を携える保育者を養成していくために、本校幼児教育学科では体験を重視した科目の設置を試みた。それは、「幼児教育体験学習」（保育士養成課程における選択必修科目で保育士養成校が独自に設置。1年次の通年で必修科目。）である。本科目の特徴は、「体験を通して学ぶ」点にある。保育者として体験することが臨ましいと思われる事項について、「ひと」、「もの」、「こと」という三項目を設定した。それぞれの項目に対して学生はどのように関わり学んでいるのだろうか。2010年度のプログラムでは、「栽培（ミニトマト・キュウリ）」「飯盒炊爨」「指編み」「お手玉作り」「保育所体験実習」を実施し、2011年度は内容をさらに拡大し、「栽培（ミニトマト・キュウリ・ピーマン・藍・サツマイモ）」「飯盒炊爨」「保育所体験実習」「藍の叩き初め」「野菜の調理」「外部講師による講演」を設定し現在プログラムは進行している。本稿では、2011年度プログラムの中から「栽培活動」に焦点を絞り、栽培活動という「こと」柄を通して、学生はどのような人に関わり学びを広げているのか、学生の振り返り記述（自由記述式）を用いてその実態を捉え、保育者養成課程における体験型学習プログラム構築への示唆を得たい。

2. 2010年度における栽培プログラムの実態—ミニトマト・キュウリ—

2010年度に取り上げた栽培活動（昨年度は「園芸」と位置付けた）は、ミニトマトとキュウリの二種類とし、振り返りについては、すべての体験学習が終了した後に行う形を取った。2010年度の栽培活動に関する学生の振り返り記述（自由記述式 85枚回収）からは、次の6つの内容が読み取れた。

①栽培活動に対する期待

小学生の時に体験した栽培活動から十年近い時を経て再び体験したことへの感動が読み取れた。小学生の頃に体験した感覚とは異なる感覚（土の堅さや重さ、耕すという行為、植物の構造など）を通して栽培活動を体験している。また、大学生になり再び栽培活動を授業として実践することの意外性が述べられており、新鮮みのある活動として捉えられていた。

- ◇収穫が楽しみだった。
- ◇大学の授業として新鮮だった。
- ◇小学校以来の懐かしい活動だった。
- ◇苗植えを大学でやるとは思わなかったので驚きました。

②植物の成長に対する気づき

栽培経験の少ない学生は、トマトやキュウリがどのような葉や実を付けていくのか、成長の様子に興味を示していた。植物が成長していく過程を目の当たりにした学生たちは、その生命力に驚く様子、植物の育ち方への気づき、丈夫に育ったことへの喜びなどが述べられていた。「雑草を抜く」、「水をやる」という作業さえ、学生にとっては数少ない経験であると同時に、億劫さもあつたようである。しかし、植物が大きく成長する姿を見ることにより、世話をする喜びが生じていった。

- ◇そのままにしておくと雑草が生えてきて気付いたら畑がすごいことになっていた。
- ◇成長して実になる生命力に驚きました。
- ◇成長が目で見れて楽しいです。
- ◇水をあげなければ枯れてしまうなど、当たり前のように思っていたことがなかなか実行できずに最初は大変でした。

- ◇トマトがブドウみたいになることを初めて知った。自分で作って収穫したものだから、あまり好きじゃないものでも食べられた。
- ◇当番になった最初の日にはキュウリの苗とかトマトの苗とか小さくて心配するという心が生まれて、当番の日じゃなくてもたびたび見るようになって、2回目の時驚くほど育っていて、丈夫な実がついていて嬉しかったです。

③苦手なものを克服しようとする意識の芽生え

虫が苦手な学生は、畑に入っていくこと自体が困難な状況であった。しかし、保育者となるためには虫を克服していかなければならないという意識も芽生えている。栽培活動が進行するにつれて、保育者の立場から考えてみるという思考が徐々に生じてきたことが推察される。

- ◇カエルやミミズがいて怖かったけれど、触れるようにしたい。
- ◇虫が嫌いなのでたくさんいても嫌でした。しかし保育士になるために虫嫌いをなくさなくてはけません。班のみんなで協力して草むしりや水やりをして少しだけ虫が大丈夫になったような気がします。
- ◇キュウリには白い虫が出ないのに、なぜトマトには虫が出るのかと思った。

④収穫後の達成感

学生自らが栽培を体験したことにより、植物を育てる大変さや難しさ、収穫できたときの喜びや感謝の気持ちなど、活動当初には見られなかった心情の変化が読み取れた。

- ◇収穫した野菜は買った野菜よりも美味しく感じた。
- ◇いつも食べている食べ物はこんなにも大変なんだと有り難さもわかりました。
- ◇実際にやってみて大変さや達成感がわかった。
- ◇水やりをやったり雑草を抜いたり、場の環境をきちんと整えなくてはならないということを学んだ。
- ◇7月くらいに実がなると思っていたけど、5, 6月くらいにはもう収穫できるくらいに大きくなっていたのでびっくりした。毎日毎日たくさんのトマトやキュウリが収穫されていた。穫りたてのトマトやキュウリは自分たちで育てたということもあって、とても濃厚で美味しかった。
- ◇大学で初めて野菜を育てたのを食べたときは、本当に自然の恵みを感じました。

⑤保育者の視点

「栽培をする」ことと、「子どもを育てる」ことの共通点に関する記述が見られた。このことから、保育者養成課程において「育てる」プログラムを導入することは、保育の根幹に触れる活動であることが示唆された。

- ◇子どものように大事に育てるということがわかった。
- ◇育てるためには水以外にも必要なことがたくさんあると学びました。子どもただお世話をするだけでは育たないと思いました。
- ◇生きるもの（育つもの）を扱うのは難しいなと改めて感じました。
- ◇子どもに接していくのと同様に、植物でも愛情は必要だと思いました。
- ◇子どもと向き合うのと同じように、植物も一日一日、日々成長するということを学んだ。
- ◇草むしりもただの草むしりではなく、虫がいたり、いろいろな発見があって子どもと一緒にやったら楽しいだろうなと思いました。

⑥仲間関係の築きと自分自身への気づき

栽培活動を通して仲間と一緒に活動することの楽しさが記述されていた。大学に入学して間もない時期からの活動ということもあり、栽培を通して仲間と関わり、人間関係を築いていくきっかけともなっていた。また、栽培活動を通して自らの行動を振り返り、自らの行動の有りに気付いていく事例もあった。

- ◇会って数ヶ月の友達と何かをやる楽しさがありました。
- ◇みんなで分担をしたりして一緒に育てるという楽しさを感じました。
- ◇最初は何のために苗を育てるのかわからなかったけど、最後はみんなで食べることで達成感を味わえました。
- ◇観察日記もお世話も班で行うことで協力する楽しさもわかりよかったです。
- ◇誰かがやってくれるという考えではダメだということを改めて実感した。
- ◇最初、水やり当番が決まる前の頃、水やりは誰がやってくれるだろうと他人任せでしたが、ある日少し気になって畑の方に行ってみると、aクラスの子が水やりをbクラス子の分（全て）もやってくれていてとても嬉しくなると同時に、自分は何やってたんだろうと考えさせられました。その後はちよくちよく様子を見に行くようになりましたが、思いやりの心を学べたと思います。

以上のように、2010年度の振り返り記述から、栽培活動を通して学生自身の心情や仲間との関係が少しずつ変化し、活動の最終段階では充実感を得ていることが読み取れた。この結果を受け、ものを「育てる」体験は、学生の保育理解を促進させる有効な手段ではないかと学科教員間で話し合われた。そこで、2011年度においても栽培プログラムを継続するとともに、栽培内容を拡大し、学生の学びの実態を捉えていくこととなった。

3. 2011年度栽培プログラムの実態—藍・ミニトマト・キュウリ・ピーマン・サツマイモ—

(1) 栽培活動開始に際して

2011年度プログラムでは、昨年取り上げたミニトマトとキュウリにピーマン、サツマイモ、藍の三種を加えた。ガイダンスにおいては、「保育者を目指す学生にとって野菜を育てる体験は必要と思うか」、「幼児にとって野菜を育てて食べる体験は必要だと思うか」という質問を設定した。記述してもらった結果、回答学生全員（86枚回収）が、両方の問いかけに対して「必要である」と述べ、栽培活動は保育者を目指すにあたり必要な体験であると認識していることがわかった。

保育者を目指す学生にとって野菜を育てる体験は必要と思うか。

- ◇将来、子どもたちと一緒に野菜を育てる機会があったとき、保育士である私たちが子どものお手本とならなくてはならないから。
- ◇体験したことのある人ない人問わず、“何かを育てる”という大変さや達成感などを改めて知る必要があるから。
- ◇保育者として働く時、子どもはたくさんの疑問を投げかけてくると思います。その時のためにも野菜を育てる過程を知っておく必要があると思う。
- ◇野菜を育てられなければ、子どもも育てられないと思うから。
- ◇野菜ですが、「育てる」ということは保育と共通する部分があると思います。育てることがいかに大変なことなのか、体験を通してその重要さを学ぶことができるから。

幼児にとって野菜を育てて食べる体験は必要だと思うか。

- ◇自分たちが当たり前のように食べている食べ物がどのようにできるのかを知ることで、生産者の思いや生命を頂いているということを知ってもらえるから。
- ◇自分が愛情を注いで育てれば野菜が育つということで、何かを作ることの喜びを感じてもらい、それを食べて、自分が頑張った成果を身をもって体験することはとても大切なことだと思うから。
- ◇野菜を嫌いな子どもが多いが、自分たちで苦労して育てた野菜を食べてみたら、きっといつもより違う気持ちになったり、美味しく感じたりすると思う。それを子どもたちにも感じてほしい。
- ◇自分の育てた野菜は他の野菜よりも美味しく感じたり、手間をかけて育てることで野菜ができたときの喜びも感じるができる。子どもが成長する中でこのような気持ちを体験することが大切だと思う。

(2) 藍の栽培

①教員による畑の準備（4月1日）

まず初めに1年生が取り組んだのは、「藍の種を撒く」作業であった。この藍は、後に葉を用いた藍染めの素材となる。1年生の登校初日であった4月2日に藍の種蒔きを実施することとなった。それに先駆け、4月1日には大学グラウンド西側に位置する花壇を耕す作業を教員自らが手がけるところから始まった。体験型学習は学生の体験のみならず、教員自らが体験す



教員自らが畑を耕す（4月1日）

る形態である。教員と学生との一体的取り組みにより学生は、「保育者像をイメージ化できるのではないか」という仮定に基づいている。

②藍の種蒔き（4月2日）

1年生登校初日（4月2日）は新入生オリエンテーションが行われ、その後、教員誘導のもと藍の畑へ移動した。担当教員から藍に関する全体説明を行った後、各々が好きな場所へ種を撒いた。この時すでに少人数の仲間グループが形成されており、グループ単位で種を撒く姿が見られた。そして、ペットボトルを用いたネームプレートを作り、各自が種を撒いた場所に立てさせたが、これは、ネームプレートを立てることにより藍への関心を高めることをねらいとしたものであった。後日の振り返りの中には、「藍は入学当初に植えたものなので思い入れがありました」という記述も見られた。一方、活動を当日に知らされた学生たちは、「なぜ種蒔きをするのか疑問であった」ことも述べられていた。



オリエンテーション後、藍の畑へ移動



好きな場所に種を撒く



ペットボトルネームプレートを立てる

③藍の植え替え（5月28日）

その後、幼児教育体験学習が開始され、学生は水やりを行う流れとなっていく。ネームプレートはその軽さもあり、ほとんどが風で飛ばされてしまうという事態が生じてしまった。藍の世話を積極的に行う学生もいたが、藍を植えた場所が校舎から遠かったこともあり、世話を怠る状況も見られた。藍は十分な水分を必要とする植物であるが、今年の空梅雨も影響し、藍の育ちは十分ではなかった。その結果、水やりの差異によって藍の育ちの違いが生じた。教員は、夏休み前までしっかりと水やりをするようにとのインフォメーションを一度行ったが、それ以外は見守る態度に徹した。それは、学生自らが気づき、判断し、行動することが何よりも重要な学びと捉えたからである。藍が枯れたり、育ちが悪い状況を目の当たりにすることも学びの一つとして位置づけた。



藍の植え替え作業（5月28日）

(3) 果菜の栽培

①ミニトマト・キュウリ・ピーマンの苗植え（4月25日）

2011年度プログラムは、2010年に栽培したミニトマトとキュウリに、ピーマン、サツマイモを加えた活動とした。栽培する畑は、2010年同様、学生がよく利用する校舎脇の花壇である。2010年の野菜収穫後、この花壇には手を入れておらず、ナズナで覆い尽くされている状態であったため、まずはナズナを引き抜き、土を掘り起こすところからの作業となった。活動の概要を担当教員から伝えた後、学生は動きやすい服装（ジャージや運動着、運動靴）に着替え、軍手をはめて作業を行った。小さな畑のため一度に全員が花壇に入ることができず、順番にナズナを引き抜いていく様子が見られた。ナズナが引き抜かれていくとカエルやダンゴムシ、ミミズなど様々な生物が出てきたため、虫の苦手な学生からは悲鳴が上がっていた。しばし花壇

には近づけない学生もいたが、時間の経過と共に、「私たちもできることやろうよ」という言葉が生じ、抜かれたナズナを片付ける、肥料を計るなど何らかの形で活動に参加する工夫が見られた。



ナズナや雑草を順番に引き抜く



協力して作業を進める



集めた雑草は二輪車で運ぶ



畑の基盤ができあがった

土を耕す、肥料を撒く、苗を植えるといった一連の作業を初めて体験する学生、あるいは幼少の頃に体験したがそれ以来といった学生が大体を占めている。肥料を計量しグループに分配する行程も要領が悪い。教員がペットボトルを半分に切りコップに見立てて肥料を掬うことを提案すると、流れ作業で分配していく行程ができていった。教員が提示する「小さな発想」が、学生の行動に変化を与えていることがわかる。また、苗を扱う手もぎこちなく、苗を強く持ったり、茎が折れそうになったりといった状況が見られ、そこには「命を扱っている」という意識はあまり感じられない。4月23日に作成したコモをかけ苗植えは終了となった。道具を片付ける場面では、スコップに付いた泥を払い落とさずに流して洗った結果、水道が詰まるとい

う事態が生じた。この時も教員は見守り続け、学生が解決していく過程を重視した。



苗を植えていく



コモをかける



泥を落としてから洗う配慮



靴の上から靴下をはく工夫

作業終了後に活動を振り返り、感想を述べてもらった。(86枚回収) 学生によっては初めての体験、あるいは小学校以来の作業であったため、畑を作る作業工程や植物の取り扱い、皆で協力して活動ができたことへの喜び、うまくできなかったことへの反省、植物が無事に育っていくように願うといった感想が多く見られた。

- ◇苗植えをしてみて、ものを育てるという意識が持てた。みんなけっこうやる気だったので、元気に成長していく姿を全員で見れると良いなあと思った。
- ◇蛙が怖かった。だけど、草抜きからみんなで少しずつやって最終段階までできて良かった。まだまだ手がかかるだろうけれど、成長して食べるのが楽しみです。
- ◇肥料の計量から本格的にやったことはなかったので、貴重な体験ができて良かったです。畝を作るためにスコップで耕すのは結構楽しかったです。
- ◇実際にやってみると思っていたより難しかった。でも皆と協力しながら自然とふれあう

ことはとても楽しかった。

◇今まで自分でお花を植える時とかは、何も考えたりしなかったけど、育てるということを考えなければいけないということを知った。

◇苗植えの時先生が「たとえ小さな苗でもちゃんとした生き物であること」や「苗の扱いは赤ちゃんと同じ」ということを聞いて、種類が違ってもし生き物は愛情を注がれながら生きていくことは共通と思った。子どもを育てるように植物の成長を見守っていきたい。

◇作業を行う前に肥料の確認を行ったのに、あまり覚えていないせいで不安になりながらやっていました。もし自分が保育者としてこのような状態だったら子どもたちも不安になると思うし、他の保育者にも迷惑をかけてしまうと思いました。こういうことは前もってきちんと自分で振り返り、本番では自信を持ってできるようにしなくてはと思いました。

②サツマイモの苗植え (5月28日)

サツマイモの苗植えは5月28日に行われた。この日は雨天となり、急遽、ゴミ袋を利用した雨合羽を作成することとなった。保育の様々な場面で急な変更を余儀なくされることはよくあることである。教員は、こうした時に臨機応変な発想により実践が可能となることを示していることとする意図を持った。



ゴミ袋を活用したの雨合羽を作る



藍の畑の隣がサツマイモ畑となる

まだ雑草が生い茂る花壇を畑にしなくてはならないが、雨の中の作業であり、学生は泥まみれになりながら作業をしていった。学生の中には「最初はためらいがあったけれど、思い切って泥にまみれたらとても楽しめた」と記述しており、活動前には、抵抗感があったと思われる。

しかし、2回目の苗植えということもあり、学生の動きには明らかな変化が生じていた。作業のスムーズさや植物の取り扱いの丁寧さが見られ、作業に対する取り組みが積極的になっていたのである。作業後の振り返りシート（80枚回収）には、1回目の苗植えと比べて能動的に取り組めたことが如実に表れていた。

「マイナスの環境をプラスの思考に転じた」振り返り

雨の中の作業であったため、多くの学生が「疲れた」、「苦勞した」、「大変だった」と述べている。しかし同時に、その苦勞を乗り越えて得た喜びや達成感も述べられている。

- ◇とても重労働だった。けど、虫もたくさんいていい土だったので美味しいサツマイモができるといいと思う。大変だった分、元気に大きくなってほしいと愛着がわくし、これからの成長が楽しみです。
- ◇苦勞した分だけ育てて収穫をできたときの喜びは大きいと思うので収穫を楽しみにしたいと思います。
- ◇すべての作業が終わったときとても充実感があつた。この気持ちを子どもたちにも感じてもらいたい。
- ◇泥まみれになって楽しく思えた。もう少し積極的に行動できたらよかったと反省。
- ◇雨が降っていて合羽作りもして大変だったけど、育った苗のための土作りをするのは大切なことだなと思いました。子どもを相手にするのもこんなに疲れるのかなとも思いました。
- ◇雨の中、泥だらけになって大変だったけど、終わった後の達成感で疲れが飛びました。このような体験が園児とできたら楽しそうだと思います。
- ◇たくさん愛と苦勞をかけたので、元気に美味しく育ちますように。
- ◇雨だったから名札を作る気満々だったので、苗植えをやると聞いたときはすごくやる気がなかったけど、実際にやってみるとすごく楽しくて夢中になることができた。私たちが一生懸命植えれば苗も一生懸命育ってくれると思うので、子どもと同じだなと思った。
- ◇今回は前よりも汚れたので、頑張った証として捉えたいと思います。



雨の中、泥まみれになって作業する

「協力」に対する振り返り

雨という逆境の中、協力をし、共に向き合った作業工程に関する振り返りも多く見られた。学生は、苦しい中でも皆で協力して乗り越えるすばらしさを実感し、決して一人ではできないことでも、仲間と協力することで達成できることに気付いている。

- ◇雨の中だったので逆に団結力がアップしたはず。早く焼き芋食べたいです。
- ◇土を耕すのも苦労しましたが、みんなで協力してできたと思います。
- ◇みんなで交代しながら畑に入って、協力しながら楽しくでき、また仲が深まった感じがよかったです。
- ◇作業一つするにもグループの人と助け合い、こういった触れ合いも大切だなと感じました。
- ◇それぞれが手分けして仕事したから早く終わったし、サツマイモの苗植えは小学校以来、すごく懐かしく感じた。先生も皆協力してくれたし、とてもうまく植えることができた。
- ◇つらくて大変だった分、みんなと協力してでき、仲が深まった気がします。それを考えると、大変な農業もいいものかなと思いました。



皆で協力して畑を耕す

「幼少期の体験」を踏まえた振り返り

幼少期における体験への振り返りが見られた。それは懐かしさや楽しさも含まれてはいるが、その経験の背後に保育者（先生）が関わっており、保育者の視点から振り返っている点は注目に値する。活動を支えるのは保育者であると認識し、陰ながら準備をしてくれた保育者への感謝の気持ちが表出されている。「現時点で苗植えをしている自分」―「過去に経験した自分」―「保育者に感謝している自分」という3つの「自分」との出会いが生じていることを読み取ることができる。

- ◇サツマイモの苗は小学生の時に植えたことがあったので懐かしく感じました。けれど、土作りなどはやっていなかったの、あのとき先生方がこうして作ってくれていたんだなと思い、今更ながら感謝の気持ちが湧いてきました。
- ◇保育所にいた幼少期にサツマイモの収穫をやっていましたが、苗を植えることがこんなにも大変だとは思いませんでした。それを考えると、やっぱり私たちを見てくれていた保育所の先生のすごさを感じました。
- ◇保育園や小学校の時に大根やトマトを育てることがありました。あのときはなんて簡単にできたんだろうと思ってたけど、陰で先生たちが一生懸命にやってくれていたんだと改めて実感しました。
- ◇よく幼稚園でのサツマイモ掘りとか聞くけど、先生は大変だったんだなと感じた。
- ◇幼稚園の時、サツマイモ掘りしたのを思い出しました。植える作業はきっと先生たちがしてくれたのかなと、今思いました。

「体験の連続性」が生かされている振り返り

ミニトマト・キュウリ・ピーマンの苗植え（4月25日）に取り組んだ自らの活動を振り返り、サツマイモの苗植えに生かした記述が見られた。周囲の友人たちと協力体制のもと、自ら積極的に取り組んでいた様子が読み取れる。

- ◇前回、肥料の計量を先生に聞いたりしてしまったので、今回はちゃんと確認してできた。
- ◇周りを見ながら行動するということが今回の活動ではよくできていたと思います。その中で自然と役割が決まっていき、班での作業としてみればとてもスムーズにできたと思います。苗植えの作業では、予想外のことが起きたり、疑問がわいたりしたが、周りに確認しながら作業を確実に進めることができました。

- ◇今回は2回目の畑作業だったので、前回よりも余裕が出て楽しめたと思います。
- ◇大きいシャベルも2回目だから前よりスムーズに使いこなせた。



共に話し、助け合いながら作業を進めていく

「多様な視点」からの振り返り

また、苗植えを通して多様な視点に気づいたことへの記述も見られた。土の堅さや、土の特質に関わる植物の実態、そこに住む虫のことなどが挙げられていた。このことから、学生は苗植えを通して様々なことを発見し気付いていることがわかる。こうした記述は前回の振り返りにおいては見られなかったものであり、経験の積み重ねが多様な見方、感じ方、捉え方をもたらす要因となったことが推察される。

- ◇土を掘っていたとき、土が硬い所は柔らかい所と違って生き物が少なく、根っこが太い植物がいたことに気付いた。
- ◇サツマイモの苗の角度を考えたり、どのくらい深く植えるのかなど考えながら作業することが意外に多いことに驚いた。
- ◇ビニールのレインコートの保温性にびっくりしました。
- ◇カニに似ている蜘蛛が出てきたときには驚きました。

(4) 果菜の栽培を振り返る (5月28日)

5月28日にはサツマイモの苗植えを実施したが、それに先立ち、画像を用いた栽培活動の振り返りを行った。教員は栽培の様子についてありのままの実態を提示した。学生の活動(世話)のあり方そのものが、植物という命にダイレクトに響いてしまったことが、学生の心を大きく揺り動かす結果となった。「もの」を育てる「ひと」の心と、「こと」を起こす実践力が、命の育みには欠かすことのできない要素であることを認識したことが予測される。

スライドを見て新たに気付いたこと、思い出したこと、考えたことを振り返る。

- ◇雑草だらけでした。もっと責任を持ってやるべきだなと思いました。
- ◇水をやらないと育たない。草拔きをしないと育たない。子どもたちと一緒に素直だと思いました。
- ◇雑草の多さをスライドを見て初めて気付きました。実がなっているトマトばかり見てしまっていたので、あまりそっちの方には行っていませんでした。ごめんね、サツマイモ。まだまだ愛がたりないのかな。
- ◇スライドを見て今まで自分が何を思い、何を考えてきたか思い出しました。
- ◇藍の方をあまり見る事ができなかったことに気付きました。
- ◇最初にした失敗も忘れてしまっていたのでスライドを見て思い出した。こうやって振り返るのは大切だと思った。失敗から学ぶこともたくさんある。
- ◇育てることは心を砕くことだという先生の言葉が印象的でした。様々な欲望に耐えてでも真心を込めて育てることでよりよい命が育っていくだろうと思いました。保育の現場でも活きる精神だと思うので、大切に心がけていきたいです。



4. 栽培したものを活用した取り組み

(5) 藍の叩き染め（7月30日）

ミニトマトとピーマンは順調に育ち、多くの収穫が可能となったが、キュウリは連作障害が、藍は水やりの差異と空梅雨の関係で育ちの悪さが生じた。藍の葉は、染め物として活用することとした。学生は、担当教員から叩き染めの説明を受けた後、藍の葉を収穫し、作業を行った。

【作業工程】



①藍の収穫（育て方によって大きさに差異が生じた）



②教員によるデモンストレーション



③藍の葉は水に付けておく



④板を敷く



⑤新聞紙を置く



⑥長い麻布に一つの作品を作る



⑦途中で作品を見合う



⑧完成した作品を吊して見る



⑨本日の振り返りを行う

活動後には、「藍を育てて染める活動の中で気付いたこと、心が動いたこと」という振り返りを行った。(74枚回収) その結果、記述は次のように分類できた。

作品に対する認め合い (36件)

- ◇みんなで染めてみてそれぞれの個性が出ていて良かった。みんなの個性が集まって完成したものは、想像以上に良いものになっていた。
- ◇最初は個々でまどまど作業していたのでバランスが悪かったが、だんだん意見が混じり合って作品も一つになっていく様子がとてもおもしろかった。
- ◇やっているときは夢中で分からなかったけど、いざできあがって全体を見渡すとすごく

綺麗な柄になっていて感動しました。葉一つ一つの個性と3人のそれぞれの感性が合わさってこそこの作品になったと思います。

- ◇葉を重ねて花にしてみたり、これはチューリップかなと思える形だったり、四つ葉のクローバーみたいな形にしていたりと他のみんなは工夫を施していた。色んな表現ができていておもしろかった。1つのグループは葉が川のように流れているような染め方をしていた。

色の変化への気付き (30件)

- ◇もう少し藍色(青っぽい色)の葉かと思っていたら、普通の緑色で、染めて時間が経つと藍色に変化するという事に驚きました。
- ◇染めるときに藍の葉っぱには個性があって、色の濃い、薄い、水分が多く染まりやすい、染まりにくい、大きい小さいなど様々あっておもしろいなと思った。
- ◇葉っぱを叩くことで色が綺麗に出ることを知らなかったので驚きました。
- ◇染め終わった後、手を洗っても手や爪に藍の色が残ってしまいました。葉は緑色だったのに、手には青い色が付きました。この色が「藍色」なのかなと気付きました。葉の色なのに洗っても落ちないほどの色が出て植物ってすごいと改めて実感しました。
- ◇水分の量で濃い色に染まる葉や、薄い色で染まる葉、黒や赤いところはその色で染まって、見ていてとてもおもしろかったです。

育てたものへの愛着 (26件)

- ◇水やりの頻度が先生より少なくなってしまう、先生が育てた藍と比べると大きくはないが、それなりに水やりを行っていたため結構大きく育ったと思う。藍の収穫をするとき、最初に比べて全てにおいて成長しており、すごく嬉しく感じた。
- ◇自分たちの育てた藍でやることでただの藍染めとは違う特別な愛着がわいて一層作業にも身が入るのではないかと思います。料理と一緒にただ作って(育てて)終わるだけでなく、発展させて、さらに誰かに認められることで最大級の達成感や充実感を得られると思います。それを子どもたちにも感じてほしいと思います。

活動に対する達成感（19件）

- ◇友達と協力して染めていて、友達が染めた所に染めようと考えたとき、葉の向きや形を考えて、どうしたら葉をよく見せることができるのか考えながら染めていました。
- ◇今回の作品もグループで力を合わせて作るというもので、一人の作品ではなく皆の作品ということで達成感を倍増させることになった。
- ◇自分たちで育てたもので制作することでとても達成感がありました。
- ◇みんなでここがこうだとか、こっちにも少しやろうとか一歩下がって全体を見てやると、より良い作品に仕上げることができるもんだなと思いました。

育てたものの活用（11件）

- ◇この活動を通じて、どんな命でも工夫をすれば何かの役に立つことを知った。
- ◇自分たちが育ててきたものが染め物として使うことができ嬉しかった。“モノ”として自分の元に戻ってくるのが嬉しかった。完成するまでの過程は長かったけれど、できあがったときの喜びが大きかった。
- ◇自分たちの育てた葉でうまく藍染めができたときには、育て甲斐があったなと感じました。
- ◇育てた藍を使ってやると一段とおもしろかったです。

その他、金槌で叩くことへの疲れや、叩く音のものすごい音量について（6件）、藍の臭いのきつさについて（5件）、他の植物でもやってみたい（3件）、子どもたちと一緒にやってみたい（3件）等が述べられていた。

- ◇身をもって体験することで気付くこともたくさんあるということが分かったので、子どもたちにも体験させてあげて様々な気付きを見つけてほしいと思う。
- ◇藍を叩いている内にすごく臭いが濃くなってきて酔ってしまいました。繊維をつぶしたからかなと思いました。
- ◇トンカチで指を挟んでしまわなければ子どもと一緒に楽しめる、また子どもと一緒に自然を感じとれてよいものだと思います。ぜひ今度家でも色んな葉や花を使ってやってみようと思います。

◇音がすごかったので少しくららしてしまいました。

1年生の登校初日（4月2日）に行った藍の種蒔きから3ヶ月が過ぎ、自身で育てた藍が作品になって返ってくるとは入学当時に想像もしていなかったと振り返る学生がいた。また、藍染めの方法について、「叩く」ことで染め物ができるとは想像もしておらず、子どもたちともできる簡単で楽しい方法があるということに関心を向けている学生もいる。色に関しては、藍から連想する紺色が抽出されると考えていたようだが、生の葉からは緑そのものが染まり、空気に触れることで茶褐色化していくことへの気づきも見られた。作業工程では最初、葉をうまく叩き、いかに布に色を載せるかに集中していたが、時間と共に周囲への関心が及び、他者がどのような染めを実践しているのか関心を抱くようになっていく様子も述べられている。そして、時間の経過と共に、個での作業はなく、集団としてどのような作品に作り上げるかという意識に方向転換していった様子も伺えた。担当教員は、途中経過を全体で共有することを提案するが、そのことによって、学生は途中過程であってもすでに個性豊かな作品へと変化している様子に感銘を受け、再び作業に戻ったときには、協力し合って一つの作品を作り上げる様子へと変化が生じている。作業終了後には、作品を天井からつり下げて見合う時間を持った。デザイン性のある作品、葉をちりばめた作品、川のような流れを表現した作品など様々であったが、学生は作品を下に置いて見るのと、つり下げて見るのとでは印象が違いと述べ、どの作品も個性的であると互いを認める関係性が生じていた。ある学生の振り返りには、「何を思い、考えながら作業するかで変わってくる」という記述が見られた。自己の内面や他者と向き合おうとする意識を持つことによって、様々な表現法や人間関係を生み出すということに気づき始めると推察される。

このように、育てた植物（もの）を活用するという取り組みは、命を育てる原点（こと）を考えさせ、多様な人間（ひと）の発想に出会う取り組みとなったと言える。

(6) 飯盒炊爨と焼き芋（10月29日）

10月29日には収穫したサツマイモを焼き芋にする予定であった。しかし、放射能への配慮から、サツマイモの収穫体験のみを行い、食すことは取り止めとした。学生はサツマイモを食べることを楽しみにしていたため、残念という声が多く聞かれた。この日は竈を組み、カレーライス作りを行った。

5. 「こと」（果菜の栽培）を介した「ひと」の広がり

以上のようなプロセスと内容にて栽培活動を実施してきた。これまでの体験学習の中で各回において振り返りを行うことで、学生が様々なことを感じ考えていることがわかってきたが、特に注目に値すべき点は、栽培活動という「こと」を通して、学生は様々な「ひと」と出会いその関係を深めていることが推察されたことである。サツマイモの苗植えにおける質問文として「今日の体験の中で、一番人と共にいたと感じられる場面を書いてください」を設定し記述してもらった。（80枚回収）

その結果、「草拔きの時」（24件）、「畑を耕しているとき」（24件）という場面が挙げられた。草拔きは重労働と感じる学生が多くおり、互いに声を掛け合いながら作業に取り組んだ様子が述べられていた。また、畑を耕しているときには、土の重さや掘り進める大変さを実感しており、これも一人では到底できない作業であったと振り返っている。これらの場面では、言葉が交わされており、「互いを思う」、「労る」という感情が表出されていた。

- ◇とくに土を掘り返している間に誰かがサツマイモや藍の苗を持ってきたり、3人で土を掘り返しているときに「一緒に作業するのはおもしろいなあ」とすごく共にいる感じがしました。
- ◇穴掘りの時に根っこをみんなで協力して抜いたとき、みんなが一生懸命な感じがしてとても濃い時間でした。
- ◇一緒に協力して畑を作っていくところです。今まであまり話したことのない人と同じ作業をして協力していくことはすごく楽しかったです。同じ仕事をしていると共感できるし、また新しい発達もできるし、その人のことを見ただけで判断していたけど、共に作業していたらその人のいいところが分かったり。
- ◇土を耕した場面では、班の人と順番に交代しながらみんなで協力して行ったことで相手を気遣ったり、声を掛け合ったりと一人でやるのではなくみんなで共にやることができ、一体感を感じることができたと思います。

「準備・片付け・掃除のとき」（17件）という場面では、雨の中で慣れない作業をしながら最後までやりきったことへの達成感と充実感、協力して取り組んだことへの満足感を得ていることがわかった。

- ◇スコップを洗うときも、汚れたり疲れたりしましたが、それも皆で分け合っで一斉に片付けることができ、誰かやりたいことを我慢したり、やりたくないことを押しつけないこともなく、全員で最初から最後まで気持ちよく作業できました。
- ◇作業が終わり、泥だらけになったスコップを協力して洗ったり、すっかり汚れた靴を友人が靴下でこすってくれたことがとても嬉しかったです。共同作業の後のお互いの労いが心に残りました。
- ◇ずっと4人一緒にいました。畑仕事から掃除まで最後まで作業を一緒にできました。先生方とも一緒に掃除ができたので良かったです。

「助け合いの言葉かけをしたとき」(17件)という場面では、具体的な言葉が示されていた。これは、これまでの振り返りには見られない特徴的な記述であると言える。辛い作業の中でも、友人たちの温かな言葉が心に響き、それがやり抜こうとする力や、乗り越えようとする力へと変容しているのである。言葉を介して、絆が深まり、心が一つになっていく関係性が築かれていることが推察される。具体的には、次のような言葉が記述されていた。

どうする？ 変わろっか？ お疲れ 抜けない 大丈夫？そろそろ代わるよ ごめんね
ありがとう もっとそっち掘った方がいいかも 大丈夫、疲れてない？ 次、私がやるよ
大きくなるんだよ、お休み 私スコップ持ってくよ 有り難う 手伝おうか？
代わろうか？ 一緒に作業するのはおもしろいなあ 私〇〇するね、じゃあ、私〇〇する

その他、「当番を作りスムーズに活動を進行させたとき」(6件)、「苗を植えているとき」(6件)、「畝を作っているとき」(5件)、「肥料や土を混ぜているとき」(3件)、「分からないところを互いに教え合っているとき」(2件)が記述されていた。

以上の振り返り記述の結果から、栽培活動を介して学生は多様な人と関わっていることがわかった。このように、命あるもの(植物)を育てる営みの中で、「人と共にいる」、「人を感じる」という体験は、保育を行う立場に立ったときに不可欠な感性であると思われる。よって栽培活動は、保育の理解を進める方法として有効であることが推察される。

6. まとめ

本稿では、幼児教育体験学習における栽培活動に焦点を当て、植物(もの)を育て、育てた

ものを活用する（こと）を通し、学生にどのような変化が見られるのか振り返り記述をもとに分析してきた。学生はこれまで体験したことのない栽培活動を実践する中で、多様な人と出会いながら関わりを持ち、広げ、深めていることが伺えた。中でも栽培活動という「こと」を介して「ひと」へのつながりが多く見られたことは注目に値する。この「ひと」とは、「現在の自分自身」、「現在共にいる友だち」、「現在共にいる教員」、「過去の自分自身」、「過去に出会った保育者」、「過去に出会った教員」、「未来の自分自身」、「保育者となったときの自分自身」、「未来に出会う子どもたち」というように、時空間を超えた多様な「ひと」との出会いとなっていた。このような「ひと」と出会い、つながりを感じていく中で保育理解を進める体験型学習方法は、保育者養成課程において有効な手段ではないかと考える。

本年度の栽培活動の結果をもとに、今後次の点を検証していきたいと考える。第一は、活動の主体である対象学生が変わることで、振り返りの記述内容に相違が見出されるかという点、第二は、栽培で取り上げる種類を変えた場合や、栽培以外の活動では記述内容に相違が見出されるかという点、第三は、振り返りにおける質問文のあり方や振り返る時期によって記述内容に相違が見出されるのかという点である。これらの検証後、翌年度以降の活動プログラム設定を行っていくことが今後の課題である。

参考文献

1. 旺文社編、『野外観察図鑑 10 植物の育て方』, 旺文社, 2008
2. 菅原和孝・野村雅一編、『叢書・身体と文化（全三巻） 第2巻 コミュニケーションと身体』, 大修館書店, 2006
3. 米安晟,『写真図解 野菜作りの新視点』, 東京農業大学社会通信教育部, 平成7年